

## 国際理解のための 日本語教育



筑波大学名誉教授  
石田 敏子 氏

○丸山 ありがとうございました。

それでは、続きまして、今度は日本語教育の立場から、石田先生にお願いしたいと思います。

○石田 石田でございます。日本語教育センターの1周年記念の会だそうで、おめでとうございます。

私は、日本語教育をご存じの方も多いようですけれども、学生さんがかなり来ていらっしゃるということですので、日本語教育を知らない方を対象に話したいと思います。難しいことは本を読んでください。私の経験に基づいた、私しか話せないことについて話したいと思います。

まず「国際理解」という言葉が広く使われていますけれども、その意味合いが、使い手によって異なるような印象をいつも受けていますので、ここでごく簡単に定義しておきます。時間があったら、またここに帰りたいと思います。**【スライド③-2】**

最近、ある会社がミャンマーに進出するに当たって、日本人社員に英語を教え込むよりも、現地採用の社員に日本語を教えるほうが早いと判断し、現地で日本語教育を始めたという新聞記事を読みました。これはなかなか賢明な決定だと私は思いました。どうしてそう思ったか。日本語教育がどのように効果を上げるための工夫をしているかについて説明していきたいと思います。

皆さん方の恐らく大半が、外国語教育として体験していらっしゃるの、英語教育だろうと思いますので、主として、日本における英語教育との比較対象で説明していこうと思います。英語教育の方はいらしていますか。よかったです。さ

もない私は生きて帰してもらえないかもしれません。

皆さんの周りにいる外国人の日本語と、皆さんの英語と比べてみてください。彼らの日本語のほうが、使うという点で成果を上げているのではないのでしょうか。これは、たまたま彼らが日本にいるからではないと思います。日本語学習にかけた時間を聞いてみてください。役にも立たない語学学習にお金を払い続ける外国人はいません。月謝を返してください、先生を替えてくださいという要求は日常茶飯事です。某大学の私のクラスで起こった例では、語学ラボラトリーで何か工事をしていて、クラスが15分間遅れたことがあります。ドイツ人の学生が、すぐに学長に、「15分間の月謝を返してほしい」と申し出ました。もしこの遅れが私のせいだったら、先生を替えてほしいという要求になったでしょう。留学の費用を全部自分で出している学生が多いことも影響しています。【スライド③

### -3】

国際交流基金が主体となって、世界的に行われている日本語能力試験ですが、日本への留学の際に使われます。1級の成績が合格の目安となっていますが、これは本来、参考として使われます。合格レベルに達していなくても、他の条件さえ揃っていれば、日本語は来日後学習すればいいわけですから。2級は日本企業への就職の際に使われています。ここで注目していただきたいのは、レベル達成の目安として使われている学習時間です。1級に関しては900時間とされています。実際には漢字系学習者でも、この2倍ぐらいかかるとしている予備教育機関もありますが、英国で毎年6週間の日本語サマースクールを5年間やった私の経験では、3級、4級に関しては、非漢字系でも、大体テストで示唆されている程度の学習時間で合格しています。最初の年に6週間、日本語が使われていない環境下で、初級レベルを学習し、4級を取り、翌年、中級をもう6週間やって3級を取るというパターンが定着していました。漢字に関しては、次の年までに忘れしまわないように、通信教育でつなぎました。【スライド③

### -4】

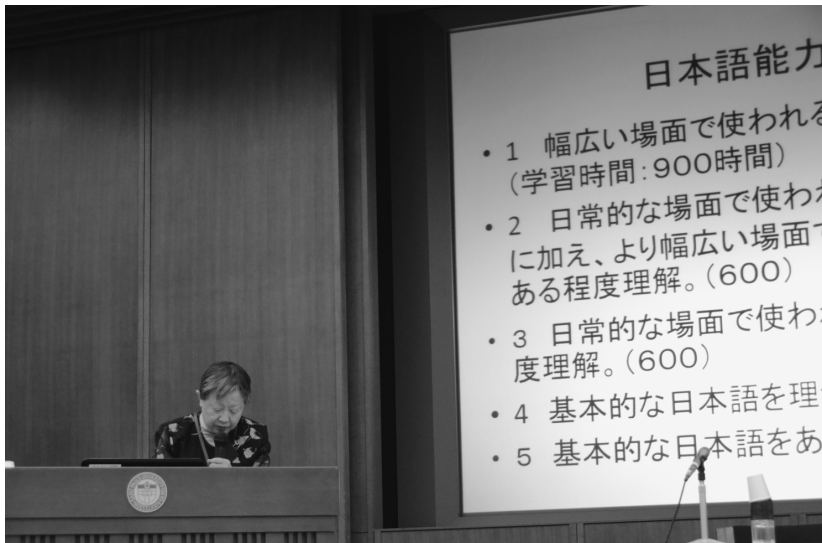
では、日本語教育がどのように行われているか。日本語教育もいろいろな流派がありますので、ここではICUの日本語教育に基づいて話します。

目標設定が各機関に任せられ、学習者の日本語学習の具体的な目的に合わせて教えられる点が英語教育とは異なります。特に初級レベルで、文科省の規定に縛られないという利点があります。

一番の問題は学習条件の分析で、学習者にとって、何がやすく、何が難しいかを知ることが大切です。学習者の身の回りにある日本語はやさしい。この大学の留学生にとって、立教という漢字は多分、最もやさしいと思います。国際基督教というの、日本人の子供たちには難しい漢字ですが、ICUの留学生にとっては、この漢字は最もやさしいはずで。

音と一緒に文字教育も始めます。日本語の文字は、漢字と平仮名、片仮名を使うので難しいと考えられています。しかし仮名があるので難しくありません。それは、表記の問題はありますが、仮名を覚えれば全て読んで、書き表すことができます。要するに、教え方の問題です。外国では、外来語表記に使われる片仮名から教えている機関もあります。全部の仮名の読みを教えるのに、どのくらい時間をかければ良いと皆さんは思いますか。今までの記録では、48分で平仮名の読みは全部覚えたという例があって、『Hiragana in 48 minutes』というテキストも出ているくらいです。

日本語の普及には、日本の経済力ももちろん関係していますが、何よりも、日本語を1年くらいみっちりやれば、ものになることを実証した成果もあると思います。日本語教育は常に学習にかかる時間との競争です。例えば、「昔々、お



じいさんとおばあさんがいました。おばあさんは川へ洗濯におじいさんは山へ柴刈りに行きました」。これは国語教育では問題にならないような点ですが、日本語教育では、分かりやすく説明しなければならない問題が入っています。これはどうしてかという、なぜ、おじいさんとおばあさん「が」いましたのか。どうして、おばあさん「は」川へ洗濯に行ったか。「は」と「が」の使い分けというのは非常に難しい。こういうようなことを分かりやすく説明しなければなりません。

したがって日本語教育では、教育と直結した研究というのは非常に大事なのです。不可欠です。私が教え始めたころは、この種の研究はゼロに等しく、家に帰って夜も眠らずに答えを出さなければならなくて大変でした。今、NHKで「花は咲く」という歌を一生懸命歌っていますね。あれなどは、なぜ「花が咲く」じゃないのか、私はいつも、大学院の入学試験の問題に最適ではないかと密かに思っています。こういうように、日本人にはささいなことに見えても、日本語学習では非常に重要であるということが出てきます。

これまでのことだけでも、日本語教育を通して、学習者たちのものの考え方が分かってくると思いますが、同時に学習者たちも、日本語を学ぶことを通して、日本人の考え方を学んでいるはずで。現在日本では、国際化のために英語のみで教育を行うのがいいと思われているようですが、これに関しては、もっと慎重に対するべきではないかと思います。日本人の場合、言葉だけの問題ではなく、ものを言うてはいけない文化も、対外的関係には影響していると思います。オックスフォード大学の各カレッジには、ハイテーブルという教員の夕食会が週に1回あり、研究員として滞在していた私も参加しました。まずアペリティフが出て、ディナーがあって、デザートがあって、それからコーヒーという段階があるので、その段階ごとに場所を変えます。そしてそのときに、両側の人たちも変えなければいけないんですね。そうすると当然話題も相手に合わせて変わり、右を向いてしゃべり、左を向いてしゃべりという、話すことを奨励する文化を私はフルに楽しみました。ですから、こういうように、日常生活のささいなことでも、日本と外国とはかなり違っている点があります。言葉は上手でなくても、話す意思があれば、そこで言葉のやり取りが起こり、徐々にコミュニケーションが成立していきます。

ヨーロッパ日本研究協会という学会がありますけれども、そこでは会員たちは、

日本語、英語、それぞれの母語で話し合っています。日本語を使える外国人を増やすという積極的な言語政策も必要で、日本人が外国人と直接接触する、日本を理解してもらう、そういう点から日本語教育を伸ばすことは重要だと思いますので、このセンターのご発展を祈っております。(拍手) **【スライド③-5】**

【スライド③-1】

## 国際理解のための日本語教育

石田敏子

【スライド③-2】

## 国際理解

文化的背景は異なっても相互に感じ方、考え方、発想が分かり、話し合いを続けることができる関係を築く。

【スライド③-3】

## 日本語教育

外国語、第二言語として日本語を学ぶ。

日本語教育 vs. 国語教育

日本語教育 vs. 英語教育

【スライド③-4】

## 日本語能力試験

- 1 幅広い場面で使われる日本語を理解。  
(学習時間:900時間)
- 2 日常的な場面で使われる日本語の理解  
に加え、より幅広い場面で使われる日本語を  
ある程度理解。(600)
- 3 日常的な場面で使われる日本語をある程  
度理解。(600)
- 4 基本的な日本語を理解。(300)
- 5 基本的な日本語をある程度理解。(150)

【スライド③-5】

## 日本語教育の実際

- 目標—学習者の学習目的に合わせ、具体的に設定。
- 学習条件の分析—学習者にとって何が難しいか。
- 教授法—何から、どういう方法で教えるか。  
聞く、話す、読む、書く